

木の目草の芽

2015年度 自然保護全国集会報告

2015年10月13日
 公益社団法人
 日本山岳会
 自然保護委員会
 TEL:03-3261-4433

年間購読料 1,000 円
 申込 : 047-463-8721
 syuaki@pony.ocn.ne.jp
 郵便番号 00180-4-710688
 加入者名 : 川口 章子

第118号

〈全国集会報告号② 目次〉

- P.1 自然保護委員会活動の歴史
 松本恒廣
 富澤克禮
- P.7 パネルディスカッション
 森武昭・尾野益大
 西條好迪・下野綾子
 司会：近藤雅幸
- P.13 支部報告 静岡支部
- P.14 フィールドスタディ報告
 大岳コース：吉田理一
 高尾の森コース：佐々木芳行
 横沢入コース：河野悠二
- P.18 活動記録

2015年度 自然保護全国集会報告

テーマ「日本山岳会自然保護活動のこれからを考える」

発足50年の節目を迎えた自然保護委員会の、今後の活動の方向性と委員会としての役割について考えるために、これまでの活動をふり返り、パネルディスカッションで意見交換を行いました。



■日本山岳会自然保護委員会活動の歴史 報告：松本 恒廣

1972年に入会してちょうど10年目頃に自然保護委員になりました。その時の委員会には、後に名誉会員になられる方々、島田巽、織内信彦、中村純二さん等が活躍されておられまして、とても新米が口を出せるという雰囲気ではなかったのですが、それからあつという間に10年が経ちまして、1990年前後に前任者から自然保護担当理事をやるようにいわれ、自分にできるかなと思っただけですが引き受けました。引き受けた途端に、長野冬季オリンピック問題と鳥海山南麓スキー場問題が浮上りまして、反対運動の旗振りの一翼を担わせていただいたのですが、その辺の話を含めまして、日本山岳会の自然保護委員会の50年を、

これから画面で見て頂こうと思います。このスライドは、私と近藤緑さんと山本良三さんの3名で構成いたしました。多くの方から資料を提供いただきまして2004年の8月に作成、上高地での委員会発足40周年記念集会以て発表したものです。

これは「山岳」第1号（1906（明39）年発行）の表紙ですが、この時すでにもう南方熊楠の山川森林の保護とか高山植物の保護とか、そういった論文が載っています。当初から山岳会は自然保護に非常に関心を持っていたということです。

まず最初にやはり尾瀬のダム問題が出てきました。「尾瀬保存期成同盟」が結成され、武田久吉さんを始めとして反対運動を展開しました。それから上高地でもダム建設の話が持ち上がりました。これは明神池の上流をせき止めてダムを作るという計画なのですがこれにも反対運動が展開されまして、皆さんご存知のように下流、奈川渡の方に



変更されました。また西穂高周辺でのロープウェイ計画と上高地スカイライン計画が出てきました。ロープウェイ計画は蒲田溪谷から尾根を越えてウエストン碑のところまで降りてくるという計画が発表されました。これに断固反対しようと松方三郎さんを始めとして武田久吉さん、日高信六郎さん、神谷恭さん、村井米子さん、後に名誉会員になられたような方々が集まって反対運動を展開してロープウェイは現在の場所まででストップさせて尾根を越えるということとをさせなかつたわけです。

一方、秩父の方でも河口湖から笹子峠・大菩薩峠・柳沢峠を貫通して八ヶ岳の小沢に出るといふ奥秩父連峰スカイライン計画というのが発表されました。これに反対しようということで運動を始めたのですが、これはむしろ山梨県側の都合で結局中止になりました。これがその時の新聞記

事です。そして昭和51年、上高地で第1回目の自然保護集会を開き、この年から各支部に自然保護委員を置いていただくようになりました。翌52年には早池峰の林道に対し、当時の今西会長の発案で反対し、早池峰の山岳景観保全に関する意見書を提出して車道廃止を要望しました。他方、関西では、大峰・白川又川流域の林道建設中止をすべく、当時の織内副会長が視察されている写真です。説明されているのが田村義彦さんと中村純二さんです。

この頃、日米環境会議というのが行われていまして、自然保護委員長の国見利夫さんが、「登山家から見た自然保護」ということでスピーチされています。

鳥海山では1978年の10月に秋田県側でゴンドラスキー場の計画があり、これに対して反対の要望書を提出して、結局これは環境庁が許可をしませんでした。北海道では日高山系を貫く全長100キロの横断道路が計画されましたが、これも途中で止まったようです。そして北沢峠のスーパールン道計画に対しては「北沢峠広域基幹林道の修復停止の要望」を提出しまして、土砂崩れがひどいので、せめてそれだけでもきちんとしてほしいと抗議文を出しました。たまには海外の方へも目を向けようということで、「ヒマラヤの生態系と

環境」というシンポジウムを日本山岳会とネパール協会との共催で行ったこともありました。

双六谷の上流地域で北陸電力の発電用の水路を設けるという問題が起こった時には中止を求める要望書を提出しました。昭和63年には屋久島ロープウェイ計画が起こりまして、村が積極的に計画を打ち出したのですが、山岳会として中止を要望し、結局中止になりました。

この辺から私が直接タッチしたのですが、長野オリンピック開催に当たって岩菅山を開発してスーパー大回転のコースを作ろうというオリンピック委員会の計画がありました。なんとか岩菅山を守ろうということで、JACも地元の自然保護団体と一緒になって昭和64年に要望書を環境庁長官等に提出して反対を表明しました。なかなか結論が出ず、地元には賛成する人もいましたが、WWF（世界自然保護基金）と日本山岳会の反対が非常に大きく響いたということが新聞でコメントされていました。

1992年の5月には自然保護委員会として「日本山岳会自然保護委員会の行動指針」を作りまして、これは今でも生きています。岩菅山の問題が片付いたと思ったら、今度は鳥海山の南麓にスキー場開発が持ち上がりました。地元支部の方が計画地の近くにイヌワシの営巣地を見つ

けまして、そういう場所にスキー場を作るとい
うのはもつてのほかということ、結論が出るま
で7年か8年かかりましたが、結果的にはスキ
ー場は中止になりました。イヌワシは今でも飛
んでいます。リニアの話でも出てきましたが、国
然記念物です。現在は鳥海山で2つがい4羽が
飛んでいるそうです。

委員会では「フィールドマナーノート」や「マ
ナーパンフレット」を日本語・英語・中国語・韓
国語の4か国語で作り、各山小屋に配ったこと
もあります。「木の目草の芽」は平成5年の9月
に始めまして、自然保護委員会のミニコミ誌で
隔月で出しています。

さきほども少しお話ししましたが、韓国から
いぶ山登りの人が多くなり、日本語が読めな
い人もあると思いますが、マナーが大問題にな
りまして、当時の担当理事、大森弘一郎さん
は韓国まで乗り込んであちらの人たちと話し
合いをしたりしていました。

90周年の記念フォーラムでは「ヨセミテ
からのメッセージ」という記念シンポジウム
を行ったのですが、300名近い来館者があ
りまして大変盛大に行われました。皇太子
殿下がご結婚されて2年目くらいだった
と思いますがお見えになりました。非常に熱
心に「参加くださいました。」

これは主に北海道支部でやっていただ
いたのですが1998年の公開シンポジウム
です。小野有五さん等が高山植物保護
キャンペーンを行いました。翌年は富
士山の自然を考えるシンポジウム
を行っています。

1996年は国営アルプス安曇野公園
リゾート構想が持ち上がってきまして、
その時には現地で自然保護集会を
開催してこれに関する環境保全の
ための抗議書なども提出しました。

早池峰はオーバーユースによって登
山道が荒廃しました。1978年に撮影
した写真はハヤチネウスユキソウが
満開の状態でしたが、1998年には
裸地化してしまっています。このよう
な場所が高校生山岳部のインターハ
イのコースになるので、これは止め
なければいけないと自然保護委員
会として動き、結局これは場所が
変更されました。

平成13年は大台ヶ原の景観保全問
題を取り上げた全国集会が行われま
した。

山陰支部は鳥取の大山の環境保全
運動として、大山に登る人は必ず
ザックに石ころを一つ入れて登り
上でそれを置いてきてくださいとい
う活動を行っています。

1995年には山梨・越後・信濃・
静岡4支部の90周年記念フォー
ラム「南アルプスの山岳環境

と登山の将来像」を行いました。1999
年から東海・京都・関西支部で森
を見る目を養う勉強会を始めまし
た。また青森支部のブナ林再生事
業や高尾の森づくり活動なども行
われています。ここまで駆け足で
きましたが、最後に先輩の方々の
スナップ写真で終わらせていた
きます。

（自然保護協力委員）

報告：富澤 克禮

私からは最近10年間のお話を
させていただきます。

私が自然保護に関わりました
のは2004年からです。従いま
して11年間、自然保護委員
として在籍していますので、最
近の10年間のことはかなり
直接関わっていたことになり
ます。

●自然保護委員会の活動の推移

自然保護委員会の活動推移を
おさげさせていただきますと、
高度成長時代の活動としては、
先ほどありましたように、自然
破壊への対応が主でしたが、
時代が変わって、高度成長時
代が終わってからは、どちらか
という地球環境重視の時代とい
う形で、必然的に行政、他の
団体との協力的な活動が行
われてきたということが言え
ると思います。その中で森林
ボランティアの活動などが活
発になり、自然保護委員会が
「高尾の森づくり」をスタ

トさせたのも具体的な動きのひとつです。もうひとつは、登山者自身に起因する問題についても取り組みました、具体的には高山植物の盗掘や踏み荒らしの問題、山のトイレの問題、登山道の荒廃の問題、これらを誘発しているオーバーユース等の問題に取り組みました。また、高度成長とは関係ないのですが、入笠山の山域に大型の風力発電を設置するという計画がありまして、現地視察や伊那市が主催したシンポジウムに参加したということがありました。結局は、この計画は中止になりました。

それからシカの食害問題への取り組みですが、高山植物が危ないということ、この報告書は2008年の7月10日に発行しているのですが、東京での全国集会でシカの問題を取り上げた時のもので、かなり厚い立派な報告書です。その時の会の様子をまとめまして、関係各所に送っています。シカの食害問題は、今でも、全国的により大きな問題になっております。

また2008年に主に活動したヒマラヤ環境調査隊の派遣、これはエベレスト街道の上の方にイムジャ湖という氷河湖があるのですが、それが決



＜スライドより＞

壊した場合に下流に対して非常に大きな影響を及ぼす可能性があるということで、慶応大学の福井先生がイムジャ湖に定点カメラを設置して、調査されているということを伺い、当時の会長が慶応大学OBの宮下さんでしたので、なんらかの形でお手伝いできないだろうかということで、エベ

レスト街道沿いの「人口調査」、「氷河湖と環境変化に対する住民の意識調査」、「家屋橋梁等の測地調査」の3つを行っています。自然保護委員会と科学委員会の合同で、一般募集しまして、調査しながらイムジャ湖まで行って、さらにカラパタルに登って帰ってきました。

「山岳団体自然環境連絡会」では、主な日本の山岳団体、現在は構成7団体ですが、その活動はこの数年間は活発に行っています。この活動は2001年の12月10日にできたようです。現在は日本山岳会・日本山岳協会・日本勤労者山岳連盟・HAT・J・山のエコー・東京都山岳連盟・日本

ガイド協会、この7団体です。3か月に2回ほど勤労者山岳連盟の事務所で開催しています。具体的活動として、「山の鳥獣目撃レポート」は山での野生動物目撃レポートをパソコンから入力していただいて、そのデータを蓄積してなんらかの役に立てようというものです。これはそもそもシカの問題があつて目撃情報を集めたらどうかということでも始めましたが、シカだけではなく、ライチョウなども減っていて問題ということで、増えすぎ・減りすぎ、両方の情報を得るためにも野生鳥獣と範囲を広げています。また、トレイルランニング問題につきましては「ツール・ド・谷川」の計画が持ち上がりまして、これについては自然保護委員会でもはかりましたが、これはむしろ山岳団体自然環境連絡会でとり上げた方が影響力が大きいのではないかとということで主催者の水上町に対して反対意見の意見書を提出、その結果、この計画は中止になりました。平成27年3月31日には環境省が「国立公園内におけるトレイルランニングの取り扱いについて」という通知を出しています。一応環境省の考え方が出ていますので、今後期待されることです。また尾瀬の国有化についての意見書も提出しています。その意見書提出をきっかけに環境省の国立公園課との定期的(年に2〜3回)な意見交換の場を持つようになって

ています。

話を戻しまして委員会としての主な活動に「山の環境意識調査(2008年)」がありますが、これは自然保護委員会がこれからどんな方向に進んだらよいかということを知るために、会員が山の環境についてどのような考えを持っているのかをアンケート調査することになりました。総会の案内に同封させていただきました。当時会員は5500人ほどでしたが、1912人の方からお返事をいただきました。この報告書は2008年の「山岳」に概要が載せてあります。ある意味では有意義なアンケートだったと思います。最近入山料についての法律ができて動き始めていますが、日本山岳会のこの調査では、環境保全のため、あるいはオーバーユースを無くすため、入山料を取ることをどう思いますかという質問に対して75%の方が賛意を表していて、一定の方向性が見えたということが言えます。この調査結果はまだ今でも参考になると私は思っています。

●自然保護委員会のおもな定例活動

自然保護委員会の具体的な活動は、毎月の月例会と機関紙隔月奇数月に発行、そして自然保護全国集會を、地方開催の場合は原則支部との共催とされています。自然観察会は最近では実施できていませんが年に1〜2回を目標としています。今年あ

たりから定期的に行うということになっていきます。それから山田副会長のご挨拶にもありました通り、自然保護委員会というのは支部委員との連携を大事にしています。特に情報交換は心掛けています。現在32支部144名の方が支部の自然保護委員になっていただいています。支部の方々へは議事録等もできるだけ送るようにしています。

「木の目草の芽」は毎号450部くらい発行しています。自然保護本部委員、支部委員をはじめ、支部協力委員、理事会メンバー、支部長、支部の事務局長、そして贈呈者に配布ということ、過去の自然保護活動にご協力いただいた方などには無料で差し上げています。有料購読者も30名ほどおられます。各山岳団体の自然保護委員会、自然保護団体へも毎号届いていますし、山岳雑誌社、例えばヤマケイ、岳人や新聞社の自然環境担当部署にも送っています。

●自然保護全国集會、最近10年の歩み

それから一番大きなイベントの全国集會についてですが、ここ10年のことを簡単に触れますと、まず私が関わった最初が上高地、発足40周年記念でした。その時のテーマが「日本山岳会自然保護委員会のこれから」ということでした。その中で活動理念とか指針をもう一度見直してみたらという提案がなされまして、翌年の集會の時に具体的

に決定したいという話が出たのを記憶しています。

その翌年は高尾で、JACの100周年記念事業の一環として行われています。シンポジウムは「森と人間の調整」ということで、これは高尾の森の活動もありましたのでこういうタイトルになっています。そこで前年提案があった自然保護活動の指針について検討・決定されました。それが最終的に理事会承認を得まして「山」の720号のトップ記事になっています。ただ理念については既にかけていたものが素晴らしかったのでそれを見直す必要はないということで、活動指針として具体的なものを出そうということになったと記憶しています。2006年は山陰大山、これは石を一つずつ持ち上げるという活動をやられていた小西さんという方が山陰にいらつしやいましたが、その活動との関連で大山の山頂の復元の様子を見るということが開催されました。活動指針に沿った形で、登山者自ら責任の一端を負うべき山の環境問題、ということと高山植物の問題、山のトイレの問題、登山道の問題、商業登山の問題、適正利用の問題、などがグループ討議をされています。2007年は富士五湖の西湖でした。日本山岳会会員として考える山の環境とマナー、これも前年から引き継いでの内容ですが、ここで具体的にJACの会員対象のアンケート調査を実施すると決

まりました。そしてまだこのころは一般的ではなかったシカ問題について、今日お見えの西條先生からだっと思えますが、日本山岳会としてシカの食害問題を取り上げたらどうかという提案がなされ、2008年の4月はこれを受けた形で環境問題と高山植物・シカの問題を取り上げようということになりました。2009年の6月になると「山の日」の話が出てきます。当時主体的に動いていた成川さんにも出席いただきました。「東北山地が語る日本の山岳風景」というテーマのパネルディスカッションでした。この時に福岡支部からの支部報告で屋久島の自然遺産の現状として縄文杉コースが非常に荒らされているという報告があり、委員会としてこのあたりのことを取組んだらどうかという話ができました。2010年の6月は上智大学で「世界自然遺産を考える」というテーマで開催、屋久島の具体的な問題が出され、そのあと我々も屋久島まで行き現地調査をした上で、提言をまとめて各方面に働きかけようということが決定しました。翌年の福岡でも「エコツーリズムと屋久島」というテーマで議論を行い、屋久島問題が浮き彫りになりました。2012年6月には「尾瀬を考える」、これは福島原発の問題で東京電力が尾瀬を手放すのではないかという話が出ていましたので、尾瀬の管理のあり方について

メインでとり上げました。2013年は立山連峰で氷河が確認されたというビッグニュースを受けて7月に立山で「弥陀ヶ原の自然に学ぶ」というテーマでの開催でした。立山はライチョウの問題もありますので、ちょうどよい場所であったと考えられます。そして昨年が広島で、アジア山岳連盟の創立20周年記念行事との共同開催とします。ここでは、宮城支部さんからは放射能測定報告、静岡支部さんからはリニア新幹線の報告が細かくされました。全国集会の流れとして、ある時に提起された問題を取り上げたうえで行っているということがある程度ご理解いただけたかと思えます。

●屋久島問題について

屋久島問題は非常に大きく「世界遺産プロジェクト」を結成して横浜国大の加藤先生や北大の愛甲先生等もメンバーに入っていたいて検討しました。福岡支部が問題提起されたことでしたので、福岡支部の元支部長の松本先生も我々と一緒に屋久島を訪問したりしています。予備調査2回、本調査1回の現地調査を行って提言を提出しています。この提言書は、日本山岳会の名前で発行したいと思ったのですが、結局常務理事会での承認が得られず、自然保護委員会の世界遺産プロジェクトという形で配布しています。発表会を現地と

東京で行っています。

●今後の課題等

定款変更についても色々な意見があり、非常に苦労いたしました。今後の課題としては自然保護活動というのはたゆまぬ継続的な活動を行っていくことが必要であるところの11年で感じています。もう一つは各支部との連携と情報交換をしっかり行っていく、その中から問題を捉えるアンテナの感度を向上させて、どのように対応していくかという事を考えています。それから自然保護委員と各支部、支部間でも、自然保護活動に対して温度差が残念ながらあることは事実です。これは支部の大きさにもよりますし、その地域に起きている問題なども全く違いますのでやむを得ないは思いますが、この辺を問題意識としては感じています。それからJAC執行部との協調・協力関係、また行政とのバランス、たとえば環境省に対しては、我々は応援団であるということで、意見としては申し上げますが何も反対ばかりというわけではないということを申し上げています。

活動の歴史につきましては、日本山岳会の100年史続編に松本さんが非常に詳しく書いていますので、自然保護に関心のある方は読んでいただけるとよろしいと思います。

以上です。ありがとうございます。

■パネルディスカッション

～日本山岳会自然保護活動のこれから～

森武昭・尾野益夫・西條好迪・下野綾子

司会：近藤雅幸

司会：最初に日本山岳会前会長の森武昭さんお願いします。森さんからは日本山岳会の経営に携わった方としてJAC全体として、また本部支部について政策的な見地から、今後の委員会活動について意見を述べて頂きたいと思います。

森：みなさんこんにちは。今日お話ししたいことは二つあります。ひとつはさきほどの松本さんのお話にもありましたように確かに40～50年前は開発問題が非常に多く、それに対してJACとして明確に反対を意思表示して、その結論も明確に出ています。例えば凍結だとか中止になったとかというように非常にわかりやすく、アクティビティもあつたと思います。その後、富澤さんのお話を聞いていると、だんだんJACが主体的に動く立ち位置が少なくなつて、問題提起型になっています。例えばシカの問題、これは高山植物を食い荒らすし大変だという共通認識は持っています。が、その先どうするかというとそれが見えない、というように変わってきています。そうすると主体的に取り組んでいないので、言葉は悪いかも知れませんが消化不良になっている面があるのでは

ないかと思えます。そしてJACの中でも自然保護委員会は何をやっているのかという声はどうしても出てきます。それで、私はこれからの自然保護委員会はもう少し進化して、自然環境保全をしっかりやっていくと同時にその啓蒙活動を行い次の世代に継承していくということに活動の柱を作るべきというのが私の意見です。それからもう一点は高齢化ということもあると思いますが、自然保護委員会に限らずJACの委員会は少し評論家的になっているのではないかと、もともと主体的に活動しないのだめなのではないか、というのが私の感想です。自然保護委員会が本当に担わなくてはいけないことは二つありました。ひとつは啓蒙運動、自然環境保全の重要性を訴えるものとしてスタートしたものが、上高地でインタープリター活動として行われ、それが独立して今は「山の自然



学研究会」が担っています。それから「高尾の森」、これも自然保護委員会が生みの親だったので。これは事情を知っていますから意見は言いませんが、やはり組織がしっかりしていなかったわけです。これを繰り返さないで是非自然保護委員会を再生していただきたい。そのチャンスとして、今度、八王子市が高尾山口に「599ミュージアム」というのを作ります。それを京王電鉄の子会社が管理運営を受託しています。そして京王電鉄の社長から直接JACへ全面的に協力してほしいという依頼があり吉川副会長が窓口となってこれから詰めていきますが、その基本はまさに自然環境保全の重要性を訴えて行こう、あるいはそういったことをベースとして登山教室をやりましょうということになっています。ですからこれは当然東京多摩支部とも相談することになると思いますが、自然保護委員会は、本当に再生の良いチャンスとします。是非これを進めて頂きたいと思えます。司会：それではお二人目のパネリスト、四国支部の尾野さんお願いいたします。四国で支部運営をされている中で、まず支部の自然保護活動における問題点、それから支部の自然保護活動は今後どうあるべきか、そういうお話をしていただくのと同時に、支部から見た本部の活動についての要望等、うかがいたいと思います。

尾野：自然保護に関しまして、山が好きというこ
とは自然が好きという事なので僕の認識では登山
者は自然保護者であると思っています。四国支部
としましては四国の山は四国支部で守らなければ
だめだという考えです。ですからきちんと自分た
ちで観察し、監視し、提言して行こうという姿勢
です。まだできて3年目ですので、これからそれ
ぞれが皆、得意分野を持つてほしいと思っていま
す。自然保護を担当するのが難しい場合はロープ
ワークでも読図でもいい、全員が主役である四国
支部を指しています。

新聞記者をやっている、自然開発と行政と保護
との折り合いをどこでつけるか、というのが永遠
のテーマであると感じております。これはいまだ
に結論は出ていません。ただ先ほど縄文杉の話が
出ましたが、当時南日本新聞が報道した際、見つ
かった時には、これは言うまいと思っていたとい
う話があつて、つまり私も山を登っていて何か希

少種をみつけると、気持ちとしては公表したいわ
けですが、そのスクープを出したばかりにオーバ
ーユースになってしまったり最終的にそのものが
無くなってしまうという問題があります。そのへ
んの問題意識をいつも思っています。そういうこ
とを踏まえながらいったん四国支部としてどん
な自然保護活動ができるのかということこれから
考えていきたいと思っています。

司会：それでは次は岐阜支部の自然保護委員の西
條さんをお願いいたします。これまで培われてき
た自然保護活動の経験を踏まえて今後の日本山岳
会としての自然保護活動のありかた等を語って
いただきたいと思ひます。

西條：自然保護に関することでは山岳会は既に
数々の実績をあげられてきていると思ひます。私
はこれを、自然保護委員会は何をやっているのだ
というのではなく、第二者的な立場で、あるいは
教育に携わった者として述べさせていたくださ
日本山岳会自然保護委員会が種を蒔いて撫育して
ようやく自立して成長できるようになったのが
「高尾の森」であり、あるいは「山の自然学」で
ある、というのをもひとつの見方であると思ひます。
ところで私は基本的には自然保護という言葉
をあえて使わないようにしています。というのは自
然保護というのは庇護とか愛護という言葉のプロ
テクション、あるいは持続・維持という言葉のプ

リザベーション、あるいは保全、マネージメント
も含んだコンサベーションというような意味合い
があると思ひます。そしてそれぞれの三つに共通
するキーワードというのがあつて、それがJAC
の自然保護のキーワードにもなっていると思ひま
す。

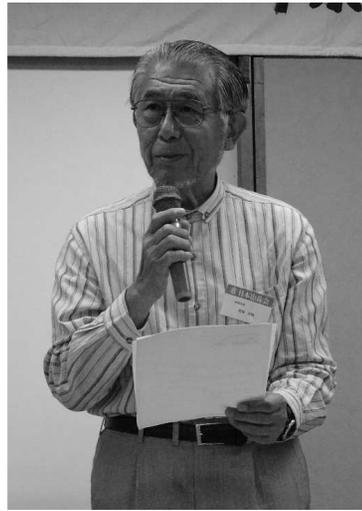
また私たちが自然という言葉を用いるときに、
これをどのようにとらえるか？、例えば人間社会
も自然の構成要素の一部分であるという風にとら
えて、その中で人間がどのように活動してゆくか、
という見方、あるいは人間の営みをとりにくく環
境を自然環境としてとらえて、それをどのように維
持し保護するか、という見方があると思ひます。

そこで私は個人的にはコンサベーションという
ところで自然資源（ナチュラルリソース）の
利用（ユース）という風にとら
えています。つまり土地利用、ランドユースの方法
が自然保護といわれている根本にあるのではない
か、あるいは具現化する手ではないかと言う風に
考えています。

一つ目には何もせずに放置しておく方法、
二つ目は現状維持するように対象に適した人為
的な作業、あるいは人為干渉を与える方法、
三つ目は全く新たな環境というものを創造して
いく。

この3つを基本に考えますと、色々なものが見





た目では解決してゆくように思われます。

例えばリニアの話が出ましたが、これは物によつては手をつけてよい所もあるし、いけない所もあるだろうと思います。南アルプスの最深部、これには手をつけずに放置しておくという、ひとつの土地利用の在り方があるうと思います。

一方では、尾張瀬戸の里山の落葉広葉樹は、薪炭林という二次林を維持することで成り立っているものです。これは20年〜25年おきに伐採して落ち葉かきをして大きな木を育てながら、多様性の高いと言われている落葉広葉樹林を維持させていくことが基本です。これも必要だと思えます。それもひとつの見方だと思います。

ということ、何が良いか悪いかという二者択一ではなく、それぞれの置かれた場所に適正規模で適正配置しながら我々が求めるものをどのようにつくり上げていくかでしょう。自然の遷移の流れ

でいきますと、山地帯森林の場合は、潜在自然植生がブナ林であっても、全てブナ林に仕立て上げてやろうという無理はありません。ある程度までは潜在自然植生としてブナの自然林という場所があるのであれば、早くそれが回復するような手立てだけをしなからあとは自然の生態系の遷移に任せるといふようなことを考えればよいのではないかと思います。

という風に考えますと、我々のようなものはいくら言っても駄目ですので、若い人たちにアピールしながら啓蒙し、勉強していくという方向にもつて行くことが大切ではないでしょうか。私自身が高校時代から山岳活動を行いながら培ってきた自然保護活動では、圧力団体としてではなくどのようなにしたら良い環境を孫ひ孫の時代まで残して行けるか、あるいは伝える努力をするか、その教育が大事ではないか、ということをお教え込まれました。ということ、こんなところが私の信条です。

司会…ありがとうございます。それでは四人目として下野綾子さん、本部自然保護委員ですが、本部委員として、今本部の何が問題なのか、どのように考えて行ったらよいか若手の視点から語って頂きたいと思えます。

下野…近藤さんがおっしゃられたようなことを言える経験は無いのですが、宜しく願いいたします

す。私は山と深くかかわるようになってから15年くらいで、皆さんに比べるとすごく短い期間だと思います。それが私の自然保護委員会に入ったきっかけでもあります。私は2010年に委員会に入りましたが、登山をしようと思って入ったわけではありません。職業がら、山の植生調査をしています。ヨーロッパアルプスでは植生調査が盛んに行われていて、原生的で安定的だと思える自然環境でもかなり変化が起きていることが数多く報告されています。では日本の山岳地帯はどうなっているのかと思ったのが、山岳会入会のきっかけです。私自身この15年、日本の山の植生に多少なりとも関わってきましたが、それは自然の変化を知るにはあまりにも短い時間です。日本山岳会の中には5000人もの方がいて、長い年月山を見てきた方がいますので、それを是非知りたい、と思ったのです。委員会ですらやりたかったことというのは、皆さんが過去に撮った写真を集めることでした。何十年前の写真を寄せていただいて、もちろん変わっていないところもたくさんあるのですが、大きく変わったところもあることが分かりました。よく環境が変わったという話を聞きますが、でもそれは昔の環境を知らない人にとってはなかなか実感しにくいものです。みなさんの持っている昔の記録があれば、説得力のある証拠になります。私自身、力不足で十分に進められては



いないのですが、委員会に所属している方はボランティアで自主的に入っているのですから、入った時に何か目的があったと思うのです。ですから自身は、求められていることに応えていくというより、入った目的を実現できる場に来たら、と思っっています。それから、今までは植物育種という農学分野の職場にいましたが、4月に植物生態学分野に移りました。これまで自分の余暇で行っていた山に関わる活動を、仕事と絡めながら進められる立場に変わりました。その分、私自身があまり動ける状態ではなくなってしまったのですが、研究室に配属される学生さんに山の良さや厳しさを、大切さを伝えていけたらと思っています。大学で学べることと山岳会の活動の中で学べることは違うと思うので、実際の現場で学生たちに発信できることがあればと考えています。これまで

委員会は私自身がやりたいことを実現する場ですが、これからは私自身が学生さんに伝えていくことを実現する場にもなってくると思います。これから何ができるかはまだまだ検討していかなければなりません。どうぞ宜しくお願いいたします。**司会**・今、森さんと西條さんの方から、自然保護というのは次代に啓蒙するべきという話が出ました。これはひとつの日本山岳会の自然保護委員会の道筋と思うのですが、その辺について、尾野さんから、例えば四国の方ではどう考えているか、何を行っているかということがありましたらお願いします。

尾野・啓蒙というのは本当に大事なことで、私はこの日本山岳会100年史を時々読み返していますが、尊敬する小島鳥水が既にヨセミテまで行き上高地との風景を比較してその重要性を発表していますし、上高地の風景保護論、八ヶ岳の大伐採に対する反対、富士山のケールカー反対、この辺が全部載っています。こういう山岳会の大先輩から、やはり我々も啓蒙されて、それが無意識のうちには普通のことであるということが自分の中にはあります。これを次の世代に引き継がなければ、上高地や富士山でなくても、また新しい場面が来た時にこれと同じようなことを続けて行く大切さを実感しています。しかし四国支部はできたばかりでこれという活動ができていません。これから

そういう活動をどんどん広めていけたらと思っています。そのためにも、温故知新で歴史に学んでいければ、活動として外れることもないのかなと思っっています。

司会・啓蒙ということのひとつの柱としてという話になっていますが、下野さん、それについて何かお話しただけですか。

下野・私自身、4月に移ってまだ経験が浅いのですが、まず、実際学生さんが昔の自然をどれだけ知っているのかを把握することから始めなければいけないと思っっています。皆さんが持っている昔の豊かな自然というイメージを、そのまま抱いている学生さんはそんなに多くないのではないかと感じています。そういう意味でも、昔の写真や記録は非常に重要だと思います。それからやはり学生さんを見てみると、実際手を動かすことに興味を持つので、支部報告の中にありましたが、草原を維持するために草刈りするとか、猟師さんと一緒に動物の痕跡を追いかけるとか、そのような活動を通じてでないか、言葉だけではなかなか伝わらないことがあるかなと感じています。

司会・確かに若い人に啓蒙するといってもなかなか難しいところがあると思います。私などもワンダーフォーゲルの方にも関与しています。その中で山田副会長なども若い方に自然保護について関心を持ってもらいたいというような取り組みを

されていますが、笛吹けど踊らずというところのようですが、その辺をどうしていったらよいか、森さん、お願いします。

森：例えば北海道支部などは夏の登山学校で10年以上の実績がありますし、その気になれば色々な仕組みもありますし、JACは財政的には厳しいのですが、そういう活動は外部に補助金申請するとかかなり色々と受け取れる状況にあります。そういうところに申請して動けば決して難しい話ではないと思います。そしてさきほど申しましたように599ミュージアム高尾山口などもそういう形で登山教室をやりたい、あるいは観察会のようなことをやりたいという話もありますので、その気になれば色々なところで機会はあろうかと思っています。

司会：では西條さん、啓蒙ということでは実際に学生さんと相対していらつしやると思いますが、若い方たちにとどのように伝えて行ったらよいか、思うところがありましたらお願いします。

西條：岐阜県を例にとりますと啓蒙という意味では地元のNPO団体ですとか公務員・技術者の方々ですとかあるいは森林管理署の職員の方ですとか、そういう方々を対象にした自然観察会を行っています。また自然保護委員会の神津島や八丈島の観察会にも参加させていただいたこともあり、啓蒙活動としては、子供さんたちの野

外観察、自然教室での学習ということで、自然観察のための野外ハンドブックを作りまして、そこへ来る方、あるいは現場のNPOや町の財団が管理しているキャンプ場とか、そういうところでの学習会に参加してもらって啓蒙活動を行っています。またかつては高等学校での出前授業、特に農林関係の学校に対しては自然に配慮した法面緑化の方法、どういう植物を使ったらよいか、外来植物はどのように駆除したらよいか等、実践的なお話をしたりしています。それは大事なことだと思いますが、支部も力量のある支部であれば良いのですが、何かやろうと思ってもなかなかお集まり願えない。そのような時に、JAC本部の自然観察会というところで何かイベントがあればそれを契機にして色々な事業が発展すると思います。

学生に対する教育ということでは私は「環境と人の営み」ということで講義を何度かさせていただきました。あとは本筋の「植生の生態学」ですとか「森林植物学」ということですので自然保護とは直接は関係ないことなのですが、私の講義を聞いてくれた人の中から環境系のコンサルへ就職されたりマスターコースに行かれた方もいますので多少は教育効果があったのではないかなとは思っています。

司会：啓蒙についてはこれからも自然保護委員会それから支部の方でも色々と考えて頂いて次世代

に伝えていきたいと思っています。もうひとつ森さんの方から出ていましたように、昔と違って主体的に動けなくなってきたり、評論家的になってきている、という問題があります。その辺について西條さん、お願いします。

西條：私たちは環境開発に対して反対のアドバリンを上げるばかりではいけないと思います。シカ問題でもライチョウ問題でもそうですが、これだけ多才なメンバーがそろっている日本山岳会であればこそ、現地におけるモニタリング調査もできると思います。毎回同じ人が調査に参加するのはなくて、山というものを基盤にして、山の自然環境に造詣の深い方たちですからいくらでも協力はしていただけたらと思います。そのモニタリングの結果をデータベース化して今後の活動に活かしていく。例えばかつて委員会の黎明期に反対運動をしましたが、運動自体はその時に一番良い土地利用の方法を望んでいたと思います。真摯に考えていたはずですが、だからこそ、ロープウェイを付けない方がよい、あるいは尾瀬を水瓶にしない方がよいだろうという考えになったのだと思います。私も調査に行っていますが四国では寒風山から石鎚までの林道の場合、掘削土の処理でかなり乱雑な林道の開設をしました。失敗している例です。こういうものは負の遺産として持ちながら、今後ある場所で開発工事に当たる場合にはどのよ

うにしたらよいかを考えなければいけないし、また屋久島の登山道整備にも通じていると思います。乗鞍でも従来工法に近い形で集団施設地区の一部を補修している例もあります。私たちは山岳環境に関するデータを集めて行政・周辺地域住民はもとより、学校教育の場も通じてPRしていく。

アピールするだけではだめなので行政に対する提言もしていく、ということしかないのではないかと、という気がします。すぐに反対するのではなくて、データを集めて科学的根拠の上に立ち、こうした方がよい、こうした方が次の時代に今の状態を残せる、あるいは残せない場合は最小限の手を加えたらどうかという形で提言できれば、実践の伴った提言ということになってまさに山ヤの独壇場になるかと思えます。

司会：西條さんからモニタリング調査、それもとにデータ化してアピールし、そして訴えていくというのが日本山岳会の義務ではないかという話がありました。モニタリングという意味では下野さんは実際に植生の遷移を写真で比較するということをやられています。例えばこれはトレランの使用前後のような形でやろうと思えばできると思いますが、その辺をどのように思われますでしょうか。

下野：今の西條さんのお話は私も非常に同感です。多分全国に支部を持っている団体はそうないと思

うのでそういうメリットを一番活かせるのではないかと思います。今のお話を聞いていて思ったのは、調査が大変なら写真でもよいと思うのです。毎年同じところで写真を撮るとかトレランの前後で写真を撮るとかそれだけでもよいと思いますし。あとは私の研究室は毎年7人くらい学生が配属されますので、必要であればその学生の卒論として一緒に調査させていただければ学生さんにとっても山の自然を知ることができ、後継者を育てるにも非常に良いのではないかなと思いました。

司会：では尾野さん、今そういった話が出ていますが人材を利用してモニタリング調査で提言できるのではないかということ、どのように考えられますか。

尾野：先ほど支部報告での紹介で僕はNPO法人の剣山クラブという団体を12年前に作りまして、剣山国定公園の監視を行っています。毎月60人くらいが出て50コースくらいに分けて毎月レポートを出しています。登山道が崩壊しているとか、道標が倒れているとか、色々な情報を人数分集めています。ですから、それがモニタリングかどうかはわかりませんが、そういう定期的なデータというのは非常に有効であると思います。ただそれを毎月県に提出するのですが、それに応えてくれることということがあまりありません。ですから、モニタリングをすることが県の目的であるのか、

本当にそれを受けてデータを活かすことが目的なのか、その辺は予算や人材の絡みもあるでしょうから一概には言えませんが、ただモニタリングの調査が大人数でしかも専門家によるもので定期的で、信頼できるデータであれば本当に有効なものと思います。本当に自然保護というのは日本山岳会が50年やっていますように、実践しなければ意味がないのであろうという風に思ったりしています。モニタリングもそれを活かして実践につながるのであれば有効だと思います。

司会：尾野さんの方から実践という言葉が出ました。最初の森さんの言葉につながってくるのですが、実践として森さんとしては例えばどのようなことが考えられるでしょうか。

森：先ほど申し上げたように評論家ではなくて、尾野さんがお話しされたように、活動を実践としてやっていくと、その中からなにか得られるものが出てくるのであって、傍観者でただ批評しているだけでは何も出てこないと思います。それが一番大事なことであるということをお願いしたいと思います。

司会：それでは時間も限られていますので、この続きは懇親会で議論したいと思いますが、今回出された啓蒙とか実践的な活動ということを念頭において活動していきたいと思えます。ありがとうございます。

（記録：元川里美）

■支部報告 静岡支部

白鳥 勝治

昨年の広島全国集会でもリニア新幹線に関する報告をさせて頂きました。

南アルプスのリニア新幹線が自然に与える注意すべき具体的な二つの事項について中間報告をさせて頂きたいと思えます。

その前に静岡支部としては自然保護活動はしていません。ただ、自然保護としては、県が展開している高山植物の保護、特にシカからの保護をシカ柵を作って展開しているのに、各自が自発的に協力しています。これは環境省と静岡県と静岡市がしていますが、これよりも大きいことが南アルプスのリニア新幹線の工事の問題になっている2点について話します。

一点目は大井川の源流域における減水量は毎秒2トン、もう一つが大井川の源流域にトンネル工事で排出される360万立方メートルの掘削土の置き場この両方ともまだ解決は付いていません。特に水の問題については、源流域における地下水の漏水がもたらされると推定されています。

そこで、これらの問題を日本山岳会静岡支

部は単独ではなくて、静岡県山岳連盟、静岡市山岳連盟、静岡県勤労者山岳連盟、公益社団法人・日本山岳会静岡支部4団体が一緒になって静岡県知事、市長に申し入れ書を提出しました。

県知事も当初あまり問題にならなかった大井川の減水量の2トンについて昨年の11月に開いた公聴会で下流域の63万人の水道利用量は毎秒1・39トンが大井川から供給されている量に匹敵すると指摘し、大変大きな問題だと世論も起こりました。

その後、JR東海が発表した流量毎秒2トンの減少の渇水対策として「導水トンネル」で本流に戻す案が出されました。

自然保護の観点からも山岳会、国内からも世論が沸き上がり山枯れ、川枯れが南アルプスの豊かな自然を壊す、危惧すべきことだと言うことでJR東海は考え直しをいま、しています。

まだ結論は出ていませんが先週の段階でトンネルの一番高いところは1200メートル以上を通る計画になっていてこの高さから、地上を流れる大井川本流へ戻すとすれば、導水トンネルの出口を標高1120メートルのさわら村付近にすることになります。直経

2・5メートル、長さ12キロメートルの導水トンネルの実現は、新たに大量の掘削土が発生するため、新たな問題としてアセスメントがとめられています。

この様な自然保護、人の生活保護を含めて、世論によって段々に改善する方向に動かして行く努力を皆様と共にして行きたいと思っています。

(当日報告分 記録：川口章子)



全国集会報告

■フィールドスタディー

7月12日

〈大岳山コース〉

参加者23名（山行L 石井秀典）

1班（L）廣田博、（SL）北原周子、柴崎徹、佐々木長秀、高田雅雄、鳥橋祥子、金尾誠一、酒井展洋、副島一義、濱野弘基、土井充

2班（L）富澤克禮、（SL）小野勝昭、吉田理一、多田政雄、大島康弘、白鳥勝治、中村博和、里見清子、中村哲也、中村照代、下野武司

大岳山は奥多摩山域にあり標高は1266・5メートルの山である。深田クラブ選定の日本二百名山ならびに田中澄江さんの「新・花の百名山」にも取り上げられていて奥多摩を代表する山でもある。その特徴的な山容から古くから沖を航行する船舶の目印にもなっていたと伝えられている。登山コースは多数有ることであるが今回は山岳信仰で栄えた御師集落がある御岳山を登着とするルートを案内していただいた。



7月12日（日）「かんぼの宿青梅」のマイクロバスでJR青梅駅に向かう。参加者の協力で定刻より早く出発できたため予定したより一本早い快速電車に乗る事が出来た。日曜のため御岳駅前発のバスは大変混雑していたが約10分で「ケーブル下」に到着。ケーブルカーの往復料金は前日のうちに東京多摩支部の北原周子さんが集金して団体割引切符を手配していただいたおかげでスムーズに乗車出来た。

「御岳ビジターセンター」に全員集合して荷物を預けて準備体操後に登山開始。ビジターセンターには石井秀典さん（東京多摩支部）が緊急連絡要員として待機してくださった。登山道は古くから信仰の山として親しまれたため良く整備されていて歩きやすかった。レンジショウマ・ギンバイソウは新潟には無い花で初めて写真に収めた。雪国から参加の私にとって一番目を見張ったのは真っ直ぐに伸びた杉の美林だった、雪国の杉は雪の重さで根本が曲がっているのが大半である。

大平山荘のある休憩場所です昼食、弁当は「奥多摩心癒し弁当」く特製きのこ飯、奥多摩産ニジマスの南蛮漬け、鶏の奥多摩麦味噌漬け焼き、煮物3種、香の物、ミニトマトの蜂蜜

ダージリン漬けで大変美味しく戴くことが出来た。

昼食後12時丁度で大岳山山頂着、記念撮影後12時15分下山開始。一部鎖場、梯子があったが難なく通過して「御岳ビジターセンター」に到着、御岳登山鉄道・滝本駅前にて解散した。

登山道で観察出来た花はカメラバヒキオコシ・レンゲシヨウマ・ギンリヨウソウ・フタリシズカ・ギンバイソウ・ヤマアジサイ・アカシヨウマ・ヤマホタルブクロ等である。

東京多摩支部会員の心温まる準備のおかげで天候にも恵まれ大変有意義なフィールドスタデイに参加させていただきました。

(文：越後支部 吉田理二)

〈高尾の森見学コース〉

参加者 39名

本部：山田和人、谷内剛、森武昭、川口章子

1班：(L)佐々木芳行、小亀真知子、武田一生、杉浦良文、新妻徹、赤石喜恵子、樋口みな子、阿部美子

2班：(L)西村智磨子、下野綾子、福田元子、

北原秀介、鈴木美代、山崎完治、埴崎滋、安田文夫

3班：(L)笈邦男、西谷隆亘、田村佐喜子、南川睦夫、川合鉛一、鬼頭良吉、井藤恵美子、小口弘美

4班：(L)高砂寿一、近藤雅幸、谷田一陽、中谷絹子、田島聖子、野島信隆、坂東文明、

SP：茂出木協子、松川信子

現地参加：佐藤守、佐藤英子

予定より15分前の10時30分に電車バス移動グループは高尾の森ベースに到着いたしました。他に若干名自家用車にて移動した方も少し遅れて到着いたしました。当日は先週来続いた雨も前日には上がり気温も30℃超える蒸し暑い一日となりました。

全員がそろい一息ついたところで、

高尾の森づくりの会代表の河西様より挨拶と会の概略説明がありました。裏高尾の小下沢国有林右半分178ヘクタールの区域で植樹を中心とした森林整備を15年、哺乳類を中心とした野生動物の生態調査を5年行ってきたとのこと。

最近では話題を集めているドローンを2台購入し、山林の植生を空から調

査する手法も取り入れているとのことでした。(空撮映像も見せて頂きました)



次に小屋内に移動しプロジェクターを見ながら会の山崎様より、森林内に設置した赤外線センサー感知式の観察カメラに記録された野生動物の説明を受けました。イノシシ、アナグマ、アライグマ、ホンシユウシカ等が記録されており、中でも肥えたイノシシの家族が活発に活動する映像を見て、この森が餌になる植物が豊富な森であることを実感いたしました。

説明終了後は昼食となり、会の方々より味噌汁を御馳走になりました。

午後からはグループ単位で森の中に移動し、会の方の案内で植樹地帯と記録カメラの設置現場を見せて頂きました。

植樹については過去14年間でオニグルミ、ケヤキ、ヤマザクラ、モミジ等16種類を1万8千本近く植え、その中で約2千本は京王電鉄グループと協賛で毎年実施している親子森林体験スクールでの成果だということです、植樹地帯は急な斜面が多く想像以上に困難な作業であったと実感いたしました。体験スクールで植樹した木の添え木にはお子さんの名を記した札がつけられており、何年後かに自分の植えた木の生長を確認できる工夫がされておりました。

最近では初期に植えたイタヤカエデが成長し、その樹液を採取して試験的にメープルシロップを作っているとのことでした。ベースに戻ってスイカ、ノンアルコールビールを御馳走になり汗が引いたところで現地解散となりました。

(文)写真：東京多摩支部

佐々木芳行

〈横沢入コース〉

参加者10名

高嶋徳紘、多田稔、竹中彰、岡義雄、笠原功、高橋重之、高橋郁子、吉田敬、広瀬雅則、河野悠二

この横沢入は、東京都で最初(平成18年1月)に「里山保全地域」に指定され、中央湿地と七つの谷戸に雑木林、人工林、水田、湿地などの多様な自然環境が広がる里山区域48・5ヘクタールで、希少な動植物が生息・生育して、子供達の見学者も多い。大悲願寺は、多摩古刹のお寺で横沢入横にあるのでご住職にお願いした。



参加者は、埼玉支部と東京多摩支部だけのこじんまりしたパーティーとなった。フィードスタディ3コースの最後に「かんぽの湯青梅」を送迎バスで青梅駅に向かう。今日も天気良く暑くなりそうだ。他のコースは大丈夫か心配である。拝島駅で五日市線に乗り換

え、武蔵増戸駅で下車。予定より1本早く着いたので、河野だけ先行し他は予定の電車で到着の参加者を待つ。先行した河野は、大悲願寺に向かい10時からの開始確認と参加者1名と落ち合う。全員揃ったところで、大悲願寺のご住職に説明・案内をお願いする。本堂の大日如来像前にて説明を受ける。さすがに本堂の中は涼しくホットする。大悲願寺は、真言宗豊山派で開山800年あまりで、木造伝阿弥陀如来三尊像（国・重要文化財、御開帳は毎年4月21日）、伊達正宗白萩文書（都・文化財）を始め都・市指定文化財が7点保管されている。他にも本堂杉戸板絵、観音堂、仁王門、鐘楼、大師堂、裏庭園、お砂踏み霊場があり、ゆつくりと訪れてみたいものだ。

大悲願寺での説明・涼み後、横沢入に移動。開放的な管理棟にて、横沢入で精力的に活動している横沢入タンボの会の方に説明を受ける。タンボの会の主な活動は里山・棚田景観の実現を目指した米作りを主体に2〜12月週1回の活動である。今日も他の小学生達が見学に来ている。説明後に里山を見学する。この地域には30ヶ所ほどの兵站用防空壕があったそうで一部を覗かせてもらう。ノカンゾウの黄色い花が風に田んぼのあるのどかな

風景である。野原には、ヤブラン、お茶の木、ホオズキ、カラムシなど昔ながらの植物がある。埼玉支部自然保護委員長の高嶋さんが絶滅危惧種に出会い感激をしておられたのが印象的であった。田んぼには、ザリガニも見える。1時間ほど見学後、管理棟に戻り昼食をゆつくりと食べる。これからは山に入り石切り場跡などの見学である。

急な登山道を少し登ると、横沢入全体の風景が眺められる。登山道は雑木林などに覆われており風もあり少し涼しい。途中にはカンアオイなども観られる。伊奈石石切り場跡を見学する。テラス（切り出した石の作業場）、ズリ場（砕いた石の捨て場）を巡り、砕石坑の石山ノ池に下りる。この池は湧水で枯れることはないそうである。サンショウウオも棲息している。最後は急な登山道を登り詰める。と天竺山山頂である。風が通って実に気持ちが良い。東側が空けておりサマーランドの観覧車も見える。天竺山三内神社本社前で写真を撮り、伊奈石の参道石段を下る。途中の登山道からは武蔵五日市駅が見える。三内神社本堂を経由し、無事武蔵五日市駅に到着し解散した。

（文／写真：東京多摩支部 河野悠二）

7／11懇親会場にて全員集合



◇自然保護委員会の活動記録◇

〈八月度〉

①山岳団体自然環境連絡会報告…7月24日

(金) 出席者…川口、富澤、渡辺。

●トレイルランニング指針等について、環境省と意見交換。

②自然保護委員会 8月26日(水)

●自然保護全国集会(東京多摩)について

●会計報告が行われ、承認された。

●全国集会の総括が行われ、時間配分に配慮する必要があることが確認された。

●全国集会の報告記事を『山』に掲載。

●自然保護全国集会(四国支部と共催)について

●開催方法など、現在検討されている事例に関する報告が行われた。

●『木の目草の芽』について

●117号の発行(8月30日予定)

●「高尾の森」に関する記事を掲載することを決定し原稿依頼をする。掲載号は未定。

●その他

●「第19回森の勉強会」(東海支部、関西支部、京都・滋賀支部)に委員が参

加予定。

●今後の自然保護委員会の活動について、意見交換を行った。

●本部自然保護委員研修

●8月29日(土)、30日(日)に、大鹿村で自然観察会「信濃支部の佐藤明穂氏の案内でリニア新幹線工事による自然環境への影響を見る」を実施。参加者10名。

▼購読料とカンパを

ありがとうございました。

〈2015年度〉

4月1日～8月31日 敬称略

上田景子(栃木市) カンパ含む・岡義彦(小平市) カンパ・田村義彦(奈良市) カンパ含む・山本敏子(東京都江戸川区)・白鳥勝治(静岡市) カンパ・渡邊陽子(安曇野市)・新妻徹(札幌市)カンパ含む・椎名宏子(東京都練馬区)カンパ・大口瑛司(北名古屋市)・島田稔(東京都新宿区)・田村佐喜子(松本市)・福田光子(秋田市)・江花俊和(福島県)カンパ・金井義雄(上田市)・北原周子(多摩市)カンパ・田井具世(相模原市)カンパ含む・権藤司(安曇野市)・樋口みな子(江別市)カンパ

含む・匿名希望(町田市) カンパ・匿名希望(新潟市) カンパ含む

〈2016年度〉

金井義男(上田市)・渡邊陽子(安曇野市)・大口瑛司(北名古屋市)・樋口みな子(江別市) 合計3万7千6百70円

ライチョウ保護活動に協力

NPO法人・山の自然学クラブの絵ハガキを購入し、「提供…公益社団法人 日本山岳会 自然保護委員会」を入れました。

費用は購読費のカンパをかわせて頂きました。絵葉書を同封いたしました。ご活用ください。 川口記

〈編集後記〉

全国集会報告号をようやくまとめることができました。みなさま今回もご協力ありがとうございました。会場での写真は廣田委員撮影です。

予定よりページ数が増えました。パネルディスカッションで語られた言葉のひとつひとつがいずれも、様々な経験や深い思考からにじみ出てくる結晶のようで、肉声を聞けば聞くほどそれらを要旨としてまとめてしまうことはとてもできませんでした。 元川